

# 經濟論叢

第137卷 第2号

- 
- 新興コンサルンと企業グループ……………下 谷 政 弘 1
- 19世紀末イギリスにおける  
高齢者の労働と生活……………武 田 宏 30
- 戦後フランスの「国有化」政策をめぐる  
一考察……………北 島 健 一 49
- インフレーションによる  
労賃収奪について……………金 谷 義 弘 68
- 書 評
- 松村文武著  
『現代アメリカ国際収支の研究』……………板 木 雅 彦 86

經濟学会記事

---

昭和61年2月

京 都 大 學 經 濟 學 會

## 。企業者と価格決定

——ケインズが把握した不確実性——

京都大学教授 瀬地山 敏

## (報告要旨)

1. 価格決定にかんするミクロ的基礎の必要性、企業、消費者の意思決定にもとづく行為は、その行為の結果が不確実な将来時点にあらわれるために、将来の不確実性を考慮にいれざるをえない。意思決定のこの側面を重視したケインズの理論において、資本の限界効率、流動性選好などの概念が、重要な役割をになっていることはよく知られている。しかし企業の価格決定にかんして、この不確実性がどのように処理されているかについて、従来にも研究されていず、マクロ経済学における物価の説明は、簡単にいえば、価格決定のミクロ的基礎を欠いたままに、総需要と総供給の相対的大きさで物価の動きを説明するという方法によっている。

2. 使用者費用 (user cost) の定式化『一般理論』(以下 *GT* と略記) のほとんど読まれていない第6章付録で、ケインズは、短期供給価格は限界費用と限界使用者費用の和に等しいと主張している。伝統的な供給価格=限界費用という理論には出てこない限界使用者費用とは、「今日」の産出量を増加させたときに、それに対応して原材料、資本設備を消費することになるが、そのことは「明日」の利潤可能性を犠牲にすることになるのだから、その犠牲値を費用として要求するものである。この概念をもちいて新投資を決定するばあいの供給価格を定式化すれば、投資を一定の収益をともなって回収するという、本質的にはフルコスト・プライシングに見られる価格管理と同じ側面がでてくる。またこの価格決定の理論は、新投資が資本の限界効率と利率率が等しくなる水準にきまるという投資決定の理論と双対的であることがわかる。

3. ケインズの企業者像 一定の収益をともなって投資を回収できるように価格を決定するという考え方は、ケインズがいわゆる「独占段階」の企業者を念頭においていたということでは決してない。貨幣理論発展のいかなる段階であれ、将来にわたって存続する耐久設備を不確実な将来の状況にゆだねるといふ投資行為に共通した価格決定の原理と見るべきである。供給価格=限界費用という通常の価格理論は、不確実な将来を考

慮していないか、あるいは同じことであるが、設備の存続期間をひとまとめに1期間とみなし、静学的である。また、「創造的破壊」という企業の革新的役割を強調したシュムペーターの企業者像と比較してみれば、ケインズではそれに相当する企業者のアニマル・スピリット（資本の限界効率はこれを反映している）を強調しただけではなく、その行為の結果に対する「保証」をデザインするという価格理論を提供しているという点で、現実の企業者像を正しく概念化している。

4. 使用者費用とスタグフレーション ケインズ自身、資本の限界効率と使用者費用という二つの概念は、経済学を現実に引きもどす効果があると認識しながら（GT, pp. 145-6）その展開をしなかったし、それ以後のケインジエンもわずかの例外をのぞいて、使用者費用の概念に注目しなかった。使用者費用の意義は上に説明したとおりであるが、これをもちいて、インフレーションやスタグフレーションの現象を、マネタリストとは異なった、またそれよりも、一層齊合的に、説明することができる。